



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ジョン・F・ハウズ「日本人キリスト教者とアメリカ人宣教師」及びErik H. Erikson, Young Man Luther
Author(s)	大山, 綱夫; Oyama, T
Citation	基督教学, 5, 40-46
Issue Date	1970-10-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46255
Type	other
File Information	5_40-46.pdf



ジョン・F・ハウズ

「日本人キリスト者とアメリカ人宣教師」及び

Erik H. Erikson, "Young Man Luther:

A Study in Psychoanalysis and History"

大 山 綱 夫

この書評の目的は、M・B・ジャンセン編、細谷千博編

訳「日本における近代化の問題」(岩波書店、一九六八年)

第四部「新しい価値観と古い価値観」に収められた、ジョン・F・ハウズ(John F. Howes)の論文「日本人キリスト者とアメリカ人宣教師」の概要を紹介し、かれの方論を、その背景にあるErik H. Erikson, "Young Man Luther: A Study in Psychoanalysis and History" (New York, 1958)と比較しながら論評することである。

この二書を同時に取り上げることは、ハウズ論文が日本近代史学に対して提起している新しい方法論の重要性を理解するうえで、またアメリカの歴史学界での一新傾向

を知るうえで意義あることと思われる。

ハウズは、現在、カナダのブリティッシュ、コロンビアに籍を置き、特に日本の無教会キリスト教運動に関心をそそいでいる日本史研究者である。本論文のなかで内村を扱った部分が精彩を放っているのも、彼の無教会への関心の深さを物語るものであろう。以下、まず本論文の目的及び内容を概観してみよう。

ハウズは、研究の目的を「キリスト教の使信とそれを齎した宣教師たちがキリスト者になった人々にどういう心理的影響を及ぼしたか」、すなわち「改宗者の態度の変化」にすえ、同時に「近代化の過程におけるパーソナ

リテイの発展」にかかわらせた。換言すれば、日本の近代化の過程におけるキリスト教の受容と、それに伴う心理的メカニズムを追求しようとするのである。その際、「個人の自我像からみると、近代化はこのような（『文化的落差に起因する自己卑下からの離脱による』評者）個人的自己確信の達成を意味する」というのが、かれの抱く仮説である。

ハウズは、まず、その研究目的にふさわしく、一八七〇年代に登場した一〇名の人物について簡単な伝記的叙述から始める。取り上げられている人物は、日本人からは海老名弾正、小崎弘道、本多庸一、植村正久、内村鑑三、アメリカ人からはジェームズ・カーチス・ヘボン、ジェームズ・ハミルトン・バラ、ルロイ・ジェーンズ、ウィリアム・スミス・クラーク、ジェローム・デーヴィスである。かれらに関する叙述内容は、およそ日本プロテスタント史家にとつては常識的なものであって、特別に目新しいものではないが、「アメリカ人の場合も、日本人の場合も、かれらの出身は、本国において社会的な没落を意識していた、宗教的には保守的な集団であった」

こと、また「これら五人の人たち（『アメリカ人』評者）がもたらした信仰は特殊な種類のもので……ここにはアメリカのフロンティアと日本の多くの青年たちが感じた精神的砂漠との両方の条件にうまく適合している信仰があった」ことを指摘し、日本人学生の社会的背景と儒教的背景、及びアメリカ人宣教師のピューリタン信仰を強調している点には注目しなければならないだろう。なぜなら、自己卑下が生じ、それが克服されて自己確信に到達する過程は、登場人物のそうした背景のなかで、説得力豊かに説明されているからである。

次にハウズが論じるのは、日本人学生の精神面における再生、回心、依存及び脱出の過程である。かれらは宣教師のピューリタン信仰にふれることによつて、精神的砂漠から導き出され、精神的再生、さらには回心を経験する。それと同時に、一時期宣教師に対する一種の精神的依存関係のなかに置かれる。宣教師を通して、かれらが知るのは先進西欧の後進日本に対する完全な威圧である。日本の近代化は、西欧の圧倒の下で始まる。宣教師の近くにゐるかれらは、他の日本人よりもはるかに強度

の劣等感と自己卑下とを感じざるを得ない。続く三十年間は、この自己卑下からの脱出の努力の時期となる。しかし、やがて自己の能力に対する確信が湧き、成人する時期がやってくる。「日清・日露の戦争と日英同盟は外国における日本の威信をまし、国民全体に近代化という目標に到達したという確信を与えた。われわれの類比からすればかれらは成人したのであった。それに平行する発展が日本人キリスト者と宣教師との間にも起った。」かくして、かつて学生だった日本人キリスト者も成熟し、自己確信に到達する。しかし、日本人キリスト者が一般には成熟したといっても、成熟度に個人差は残った。

ハウズが「緩慢なる成熟者」として取り上げるのは内村鑑三である。内村は五人のうち最も遅く成熟する。ハウズは内村を懐疑的で敏感な青年に似せて論じている。ハウズの内村への関心は、専ら青年内村である。内村の影響力が、他のキリスト者よりも強い理由として、ハウズは、「内村はキリスト教に回心した人の自我像の問題の微妙な点に触れる」からであると考ええる。

さらに、「広い意味において、それは、その人が生まれ

ながらに属する国家や文化の要求と、その人が自分の自由意志から採用する宗教の要求との関係の問題である。」と説明する。青年内村の悩みは、いかにして「一箇の人間」となるかである。しかも、かれの選らぶ道は、「自己の原理を妥協させることを拒むことよって一箇の人間となる」ことなのである。まさにこのゆえに、かれの悩みは解決されず、目的は達成されない。かれが他の四人の日本人キリスト者のごとく成熟するのは、やっと晩年になって、植村に遅れること十五年目のことである。その成熟も一見安定してはいるが、かれの弟子たちの行動を見ると、かりそめのものなのではないだろうか。

このように論じ来たところから、日本キリスト教史の三つの問題、すなわち、なぜ例外的な能力のある人物がキリスト者となったか、どのような場合に日本人キリスト者はナショナルスティックになったか、なぜ内村の弟子たちだけが戦時下及び戦後の国家に対して断乎たる批判者になり得たのかの問題に対して解答が与えられると、ハウズは考えるのである。本論文の最後のところに、後進国の近代化に際して、先進国の取るべき心構え

のごときものが、研究から導き出された教訓として語られている。

以上がハウズ論文の概要であるが、ここには注目に値する新しさがある。研究対象になっている日本人五名及びアメリカ人五名は、いずれもよく知られたキリスト者であり、登場人物に関する限り、目新しいものはない。

また、用いられている史料もほとんど基本的なものである。本論文の新しさは、既知の人物の取り上げ方と既知の史料の用い方、分析の仕方、すなわち、その方法論にあるといわなければならぬ。このことは、エリクソンのルター研究の場合も共通していることである。

その方法論とは、歴史学における心理学的方法論、さらに限定すれば、エリクソンの場合にはその副題が示すように、歴史学における精神分析的方法論と呼ぶことができる。

心理学の発達に伴って、いかなる個人といえども、他の人間と同じような精神発達の法則に従い、また、その法則の普遍性は、ますます確かなものになりつつあるといわれるようになった。法則性には、留保を残す立場か

らでも、人間の精神現象は学問の対象となっている。そのような心理学から、人間を対象とし、内部で法則性樹立の可否を問題にする歴史学が、なんらかの補助学的援助を受けうることは、予想できることではあった。しかし、今までのところでは、専ら心理学者が歴史上の特異な人物を、その歴史的性格を捨象して「患者」として考察することはあっても、歴史学者が心理学の成果を補助学ないしは方法論として用いたという例は、ほとんどなかったといってよいだろう。その意味で、歴史学者ハウズの方法論、また歴史上の人物の歴史性に関心をそそぐ心理学者エリクソンの方法論は、注目に値するのである。

歴史上の人物に関する、従来の心理学的研究の典型的一例は、Sigmund Freud and William C. Bullitt, "Thomas Woodrow Wilson, A psychological study" (London, 1967) (岸田秀訳、紀伊国屋書店、一九七〇年)に見られる。フロイトらは、アメリカ第二十八代大統領ウィルソンの生涯を、人間の精神生活における力、リビドーでもって説明する。かれらにとっては、リビドーが個人を動かす、歴史を動かすということは動かしたい命題であ

る。例えば、この書のなかでは、第一次世界大戦へのアメリカの参戦の経過は、専ら、ウィルソンの幼児期の経験に起因する救世主キリストとの同一視、すなわち平和をもたらず者との同一視によって説明されているのである。ここでは、ウィルソンという個人とアメリカという歴史社会は、無関係のごとくに、あるいは関係があっても本質的には静的なものとして捉えられているのである。これに反して、精神生活のほとんどが幼児期をもって終結するとは考えないエリクソンは、フロイトのごとく幼児期の経験を特別に強調し、それによっての公生涯の一切を説明し尽すという立場はとらない。歴史学は、フロイトが伝記という領域に入ってきて、人間関係を単に生物学的欲求交換関係としか考えない限り、また歴史性を捨象する限り、歴史学への貢献とは受け取らないであろう。なぜなら、そこでは人間はあくまでも生物学・医学・心理学の対象であって、歴史学の対象とはされていないからである。

一方、従来の歴史学は、個人への関心を幼児期にではなく、公生涯にそそいできた。公生涯との関連において、

史料操作を行なってきた。個人が研究対象となる際、かれの公の、確定した思想や信仰を語る史料によって、かれは再構成されてきた。心理学においても、いわゆるフロイト左派（新フロイト派）に属するエーリッヒ・フロム（Erich Fromm）らは、フロイトに対する反動から、公生涯に重点を置いていると評されることがある。フロムは、「フロイトは歴史というものを、社会的には規定されない心理的要素の結果であると説明したが、われわれはそれに強く反対する。」¹⁾ *Escape from Freedom* (New York 1941)（日高六郎訳、創元新社、一九五一年）のなかでいっている。

エリクソンは、このような幼児期重視のフロイトとも、また、公生涯重視の人々とも異なった角度から歴史上の人物を考察する。フロイト心理学のなかで、一九二〇年以降発達してきたといわれる自我心理学の研究者たるエリクソンは宗教改革者になる前のルター、すなわち青年期のルターに焦点を合わせる。この時期は、フロイトや公生涯重視の人々が、看過するか、看過しやすい時期と考えてよいだろう。宗教改革者ルターではなくて、宗教

改革者になる前のルターである。青年期は、エリクソンによれば、社会人としての自我が形成される時期であり、真の自己の identity (同一性、統合性、価値、その他いくつかの訳語が使われている) が確立する時期である。かれは、Anna、フロイト (Anna Freud) の自我の防衛機構及び適応機構の理論を用いて、自我の形成期のルターを、中世から近代への歴史的相伴事情 (historical concomitance) のなかで考察するのである。青年ルターは、悩みつつ成人し、やがてかれのうちには安定した完全さと受容力とが見られるに至る。外側では、中世から近代へと時代が進む。

ハウズの方法論は、エリクソンのそれに倣ったものである。ハウズの場合には、文化的落差に起因し、敵意の裏返しともいえるところの自己卑下に悩み、やがてそこから精神的に脱出するまでの、すなわち精神的に成熟するまでの、日本人キリスト者を、日本の近代化という歴史的相伴事情の中で考察しようと試みるのである。エリクソンが焦点を当てる時期のルターは、identity crisis に悩む。identity の危機とは、「自分は誰か」という問題

の危機である。自分は一体何者なのか。ここを通らずして、ひとは成熟することはできない。ハウズが描く内村は、「馬鹿正直といえるほどの態度で」、「一箇の人間」となるために悩む。一個の人間となっていない自分は、一体何者なのか。エリクソンに従えば、ルターは、やがて identity crisis に打ち勝つ、selfintegration (自己完成、自己確立、その他いくつかの訳語が使われている) をなし遂げて、人間となる。プロテスタンティズムもそこに生じる。ハウズの描く日本人キリスト者は、日本の近代化と平行的に、identity crisis に打ち勝ち、成熟する。内村も遅れはするが、やがて成熟し、安定と受容力とを己がものとするに至る。

すでに明らかなように、エリクソンもハウズも自我心理学の成果を、大胆に歴史学に取り入れているのである。自我心理学に拠って、歴史的個人の自我の発達にかかわる問題を究明し、同時にそれを歴史的相伴事情のなかで考察するということである。しかし、この方法論でもって歴史学の全課題が処理される訳ではないことは充分予想される。この方法論の強さと弱さとは、それが専ら伝

記ないしはそれに関連した領域に限定されるというところにある。しかしながら、勿論、歴史的相伴事情を考察する際には、従来の歴史学の方法論や成果に大いに頼るし、また、伝記を充実させうる個人を対象とする際には、個人の生涯に限定されない広いパースペクティヴを提供してくれることも確かである。事実、エリックソンのルターも、ハウズの十人の登場人物も、読者にそうした広いパースペクティヴを提供しているのである。

現在、アメリカにおいては、このような方法論が歴史学にとってひとつの有力な方法論となりつつあるようである。いづれにせよ、ハウズによって紹介された、この方法論は日本の歴史学界にも議論を呼ぶことであろう。